

富山県における生活科・総合的学習の歩みと今後の課題

The History and the Future Problems of Life Environment Study and Integrated Study in Toyama

水 上 義 行
MIZUKAMI Yoshiyuki

はじめに

平成元年3月15日、学習指導要領は小学校低学年に「生活科」を新設した。そして、従前から行われてきた低学年社会科及び理科の廃止を決定した。戦後、数次の改訂を重ねてきた学習指導要領の中で、教科の改廃は初めてのことであった。このことは、小学校教育に大きな変革を求めるものであり、学校現場は「生活科」の実践に試練の時代を迎えたのである。爾来20年の歳月を見ると、様々な障害はあるものの、今や小学校低学年教育の核として定着し、平成10年に新設された「総合的な学習の時間」と併せて、新しい学習指導要領が求める「生きる力」の基盤をなす時間となりつつある。

本稿では、新設当時「10年たったら消える」と風当たりの強かった「生活科」が、富山県において、この20年間にどのようにして定着し、学校現場にどのような効果を与えてきたのかについて、富山県の小学校現場における「生活科教育」及び関連が深い「総合的な学習の時間」を考察してみたい。

富山県における生活科教育の始まり

富山県において初めて生活科が公開研究会で取り上げられたのは、1988年(昭和63)5月17日(火)、富山大学教育学部附属小学校(以下附属小学校)における教育研究発表会である。生活科誕生に対する先行研究として、1年「わたしのかわいいおともだち—きんぎょさん—」(飼育活動)、2年「ほら、学校が見えるよ」(探検活動)が公開された¹⁾。そこでは、子供の自然離れや体験不足、低学年の子供の実態をとらえた学習活動の必要性が提起され、生活科の目標である「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養う」という従来の教科とは異なる授業が公開された。その後、附属小学校は、今日に至るまで毎年生活科の授業を公開し、富山県における生活科研究の先導的役割

を果たしている。

また、同じ1988年に、砺波市立出町小学校は、文部省から生活科研究推進校として研究開発指定を受け、平成3年に文部省生活科実施推進協力校として、富山における生活科研究のパイオニア的役割を果たした²⁾。

一方、富山県小学校教育の最大の研究組織として、戦後の昭和24年4月に結成された富山県小学校教育研究会は、附属小学校、出町小学校の実践をベースに生活科研究への取り組みを始め、平成元年に富山県小学校教育研究会生活科部会（以下 生活科部会）を立ち上げた。生活科部会は、富山県内10ブロックの南砺波、北砺波、高岡、氷見、射水・新湊、富山、上新川・婦負、中新川・滑川、黒部・魚津、下新川及び附属小学校、富山市立堀川小学校から合計12名の研究専門委員を選出し、研究計画作成試案の検討に入った。

低学年社会科と理科を廃止して、子供主体の「具体的な活動や体験」、「自分と身近な社会や自然とのかかわり」、「自分自身や自分の生活を考える」、「生活上必要な習慣や技能の取得」を核とする授業に対して、教師はどのように取り組めば良いのかが課題となり、生活科部会の研究計画作成試案は難儀を極めた。12名の研究専門員は、様々な情報を持ち寄り社会科でもなく理科でもない、子供の自立への基礎を養う授業の創造に時間をかけたのである。しかしながら、前例のない試案の作成と新教科への期待は、研究専門委員の新しい教育へのロマンを掻き立てることとなった。時を同じくして、県東部に宇奈月町立浦山小学校、県西部に福野町立福野小学校を研究推進校として指定し、ここに富山県全域を視野に入れた生活科の実践的な研究が始まった。

生活科部会研究計画作成試案に基づく研究のスタート

平成2年4月に生活科部会作成の、記念すべき第1号の研究計画作成試案が、富山市立堀川小学校における研究推進全体会で県内10ブロックの代表に発表された³⁾。

研究主題は、「身近な社会や自然に働きかけながら、自らの生活を豊かに作りだす子供を育てるにはどうすればよいか」であり、主題設定の立場として「一人一人の子供が生活科の主体者として、人やモノ、自然、自分自身とのかかわりを持ちながら、エネルギーに生きていく姿を求める」、「低学年の子供は、本来具体的な活動を通して思考するという特徴をもつ。この背景には保育所、幼稚園で幼児期の教育を受けてきた子供たちは、具体的な活動や体験、遊びの中で生きてきたという事実がある。そのような育ちを小学校の入門期からさらにはぐくみ、確かな根付きを図っていくことの重視」を述べている。

また、研究内容として教材開発と活動や体験のあり方に焦点を当てて述べており、教材開発においては、地域の社会や自然を生かすと共に、それらを一体的に扱うようにすること。例えば、植物の栽培が、単なる成長の過程の理解という自然認識的な学習に終わるのではなく、成長や収穫の喜びを味わったり、互いの協力に感謝したりする学習にしていくこと。二つ目は、体験活動の確かな見通しをもって構成すること。例えば、段ボールという教材活用において「おぼけやしきをつくろう」と提示するか「ようこそぼくらのあそびのくにへ」と提示するかで、子供の学びは大きく変わるということである。三つ目は、子供の興味や関心を何よりも大切にすることであり、子供たちの生活そのものに帰着することを考慮して開発に心がけること。四つ目は、教師自

身が地域社会の一員としての自覚をもち、的確に地域理解に努めることであり、地域の習慣や行事、道端の小さな生き物を教材としてみることのできる教師自身の目を鍛えることを投げかけている。そして、活動や体験のあり方として、子供の実態に即した場の提示、子供主体の遊びを生かす、問題解決的な学習を取り入れることを提唱している。

富山県における生活科は、子供の生活に即した様々な体験や活動を通して社会認識や自然認識の芽をはぐくむと共に、幼児期から児童期への円滑な流れを提起したのである。その後、生活科部会では、20年という時代の変遷と県内の学校現場の要請により、数次に渡って研究主題の見直しを行い、県東部、県西部に指定された研究指定校を中心に、富山県内の生活科の歩みを支えてきた。

生活科部会研究計画作成試案の変遷と研究指定校

富山県小学校教育研究会は、平成2年度から研究指定校を設けて先行的な研究を始めた。したがって、富山県における生活科の流れは、生活科部会の研究計画作成試案及び研究指定校の実践が明らかにしてくれる。生活科新設以来以下のような歩みを続けてきた。

- ・平成2年度～3年度 「身近な社会や自然に働きかけながら、自らの生活を豊かに作り出す子供を育てるにはどうすればよいか」

研究指定校・・・県東部 宇奈月町立浦山小学校、県西部 福野町立福野小学校

- ・平成4年度～5年度 「自分の願いやこだわりを大切に、身近な社会や自然に意欲的に働きかける子供を育てるにはどうすればよいか」

研究指定校・・・県東部 富山市立太田小学校、県西部 高岡市立成美小学校

- ・平成6年度～7年度 「自分の思いや願いを大切に、身近な社会や自然に意欲的に働きかける子供を育てるにはどうすればよいか」

研究指定校・・・県東部 立山町立立山・釜ヶ淵小学校、県西部 砺波市立砺波東部小学校

- ・平成8年度～11年度 「自分の思いや願いを大切にしながら、身近な社会や自然に意欲的に働きかける子供を育てるにはどうすればよいか」

研究指定校・・・県東部 大沢野町立大久保小学校、県西部 福光町立福光東部小学校
 県東部 富山市立寒江・老田小学校、氷見市立窪小学校 (10,11)

- ・平成12年度～13年度 「自分の思いや願いを膨らませながら、身近な人々、社会及び自然に意欲的に働きかける子供を育てるにはどうすればよいか」

研究指定校・・・県東部 入善町立上青小学校、県西部 高岡市立横田小学校

- ・平成14年度～19年度 「自分の思いや願いを膨らませながら、身近な人々、社会及び自然に主体的に働きかける子供の育成を願って」

研究指定校・・・県東部 黒部市立三日市小学校、県西部 小矢部市立津沢小学校 (14,15)
県東部 富山市立東部小学校、県西部 高岡市立国吉小学校 (16,17)
県東部 富山市立古沢小学校、県西部 南砺市立福光東部小学校 (18,19)

・平成20年度～21年度 「自分の思いや願いを膨らませながら、身近な人々、社会及び自然に主体的にかかわり、生活を豊かにする子供の育成を目指して」

研究指定校・・・県東部 上市町立相ノ木小学校、県西部 射水市立大門小学校

研究指定校は、例年11月に開催される富山県小学校教育研究会研究集会において研究発表を行い、研究成果を県内全ての学校と共有する。それを受けて、各ブロック及び附属小学校、富山市立堀川小学校から選任された研究専門委員により次の2か年を見通した研究計画を試案という形で作成する。したがって、基本的には2か年継続の研究計画である。

生活科の草創期ともいふべき、平成2年度～3年度にかけての、いわゆる学習指導要領移行の期間に行われた富山県における生活科学習は、先にも述べたように「身近な社会や自然に働きかけることを通して、自らの生活を豊かに作り出す」ことを提起した。当時、生活科という新しい教科の理念に照らし合わせ、身近な社会や自然を対象とした体験的な学習活動は、子供たちの学習における方法なのか目的なのか問われることとなった。体験的な学習活動が、何かを得るための方法として取り入れられることは、従来の教科の学習と変わらないし、子供をある方向へ誘導するような授業とは一線を画すべきではないかという議論が沸騰し、このことが新教科である生活科への関心を高める契機となった。

平成3年谷川は研究集会で⁴⁾「一斉授業中心の日本の授業が生活科によって変わろうとしている。まず、教科書に子供が活動している場面が出てきた。指導要録では低学年の評定を無くし、観点別学習状況の中でも関心・意欲・態度を重視するようになってきた。生活科では、授業の見方、指導案の書き方も変わってくる。また、子供をよく見ることや、地域との交流や体験的学習を取り入れるなど授業を工夫することが大事になってくる」と述べる。

このような経緯を経て、新しい学習指導要領完全実施とともに生活科は平成4年度より低学年教科として、より注目を浴びるようになってきた。生活科部会の研究計画作成試案は「身近な社会や自然に、意欲的に働きかける・・・」ことが目的とされるようになり、子供たちの「意欲」が問われるようになってきたのである。生活科部会が、「意欲」を中心にした研究は、平成13年度まで続く。この間、富山県では、「次の改訂では消えるのではないかと」、一部に危惧される事態を招くようになっていた。それは、子供たちの意欲を大切にする生活科の授業が、従来の国語や算数といった授業と比較され、「遊んでいるだけでないか」とか「子供を放任している」などという見方が出てきたからである。特に、低学年を担当したことのない一部の教師や一部の管理職の生活科を否定的にとらえる壁が大きな障害となった。

確かに、従来の教科とは授業の展開、評価に大きな違いがある。初期に実践された授業の一例を上げると、以下の通りである。

1年生「太田の秋だいすき」(富山市立太田小)、「なかよしランドをつくろう」(高岡市立成美小)、「ぼくわたしのがっこう」(富山市立新庄小学校)、「秋ってだいすき」(砺波市立東部小学校)

2年生「ぼくらは浦山〇〇ガイド」(宇奈月市立浦山小)、「大きくなあれ、私のなえ」(福野町立福野小)、「おたよりっていいな」(立山町立立山小学校)、「のってみたいなぼくらのふね」(砺波市立出町小学校)

これらの授業は、教室ばかりでなく学校の中庭、体育館、集会室、プールなどが授業会場となり、山のような段ボールや発泡スチロール、校庭の落ち葉などの中で授業が進んだ。それは、教科書を片手に、読み書き算盤をする授業とは大きな隔たりがあった。新しい授業スタイルの生活科への理解は、授業者の懸命な努力にもかかわらず苦戦を続けた。このことは、富山県に限ったことでなく、全国的な課題であったと考える。

文部省は、平成2年1月に、小学校生活指導資料「指導計画の作成と学習指導」、平成5年9月に、「新しい学力観に立つ 生活科の学習指導の創造」と、立て続けに生活科の指導資料を発行した。また、富山県教育委員会においても各年度に発行する「幼・小・中学校教育指導の重点」において、生活科学習への理解と授業の充実に努めてきた。

中でも、文部省は、平成7年10月に発行した「新しい学力観に立つ生活科授業の工夫」⁵⁾の中で、雪の神通川原で活動する附属小学校の実践をグラビア2ページに渡って4枚の写真を掲載し「身近な環境を学習の対象や場にして豊かな活動を展開する。存分に遊んだところにふるさどがある」と全国の小学校に発信した。そして「雪の河原、だれも踏んでいない雪原に一步を踏み入れる快感、太陽の光が乱反射してまぶしい。草に付いた氷をすっと上に引き抜く。中が空洞になっている。それを望遠鏡に見立ててのぞく。のぞいた先に何日ぶりかの青空と真っ白なふるさとの山々がある。遊び終わって堤防に集まる。河原には存分に遊んだ名残がいっぱい。汗した体に、河原をわたってくる風がこちよ。だれかが叫ぶ。山がきれい。ほんとだ、今日は特別だ。子供も先生もうっとり山をながめる」と、自然の中で思い切り遊ぶ子供の姿を絶賛した。

富山県の実践は、全国の小学校に向かって発信されたのである。教師は、子供の活動の中に意味を見出し、その子なりの思考力や判断力、表現力や関心・意欲・態度などを注視し、より高いねらいに向かって支援していくことの重要性が問われたのである。神通河原の実践は、素晴らしい社会や自然環境の中で、子供たちの自主的・主体的な学びをつくり上げる必要を証明したのである。

このような実践を契機として、富山県の生活科は意欲的な教師たちによって実践されるようになり、平成11年5月に発行された、文部省「小学校学習指導要領解説 生活編」では、作成協力者として、出町小学校の古石教諭が参加をする機会を得ることができた⁶⁾。

生活科から総合的な学習の時間へ

平成10年12月文部省は、学習指導要領の告示を行い、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味や関心に基づく学習として「総合的な学習の時間」を新設した。しかし、平成10年版学習指導要領は、平成14年の完全実施前から、「ゆとり教育批判」「学力低下」などに翻弄され、平成14年1月の文科学大臣による「学びのすすめ」、平成15年12月の学習指導要領一部改正など、学校現場は学習指導要領に振り回される結果となった。

富山県においては、平成14年度の学習指導要領完全実施に備えて、各小学校では先行的な試

みがなされていた。平成10年5月には、富山県内で初めての試みとして附属小学校では、総合的な学習の理念を生かした教科学習及び総合的な学習が公開された。そして、富山大学教授山際隆、文部省初等中等局小学校課教科調査官北俊夫、上越市立大手町小学校校長小林毅夫、秋田大学教育学部附属幼稚園副園長浜田純による公開シンポジウム「総合活動を教育改革の起爆剤とするには」を開催した。学校は、未来に生きる子供たちに対して何をなすべきかが問われることとなり、総合的な学習の時間の有効な活用が問われる契機となった。また、平成11年度には、同小学校において、総合的な学習の時間を生かしたカリキュラムづくりが提起され⁷⁾、地域を活用した「年間カリキュラム編成のポイント」が、具体的に示された。これらを受けて、各学校では、横断的・総合的な年間カリキュラムの編成や授業実践が試みられるようになった。

一例を上げると、大島町立大島小学校では、平成12年10月「総合的な学習への道筋」をテーマに生活科・総合的な学習を公開し、1年生生活科「学校のまわりはあき」、4年生総合的な学習「わたしも絵本作家—情報を集めて発信しよう—」、6年生「ぼく・わたしの体力づくり—国体競技・弓道に挑戦—」を題材に、総合的な学習づくりの基本を提起した。

このような先進的な取り組みの中で、富山県小学校教育研究会は、平成13年度に総合的な学習の時間部会（以下総合部会）を立ち上げた⁸⁾。そして、生活科部会と同じように研究計画作成試案に取りかかり、総合的な学習が目指す「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的・創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」「各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにする」という、総合的な学習指導のねらいを受けて、研究主題「自ら課題を見つけ、主体的に追究し、自分の生き方を考えていこうとする子供の育成を目指して」を設定した。同時に、平成13年度に研究推進校として県東部は、富山市立清水町小学校、県西部は、大島町立大島小学校を指定し、実践的な授業研究をスタートさせた。

研究主題は、その後主題を変えずに平成15年度の県東部入善町立桃李小学校、県西部氷見市立窪小学校、平成17年度の富山市立光陽小学校、県西部高岡市立古府小学校へと受け継がれている。総合的な学習は、生活科に比べて学習内容が国際理解・環境・福祉・情報と学習指導要領に例示されていることや、3年生から6年生まで4年間を見通すことや、指導していく教師の体験・経験不足などから思うような実践がままならず、趣旨徹底や年間カリキュラムの作成や授業方法などに時間がかかったものと思われる。しかしこの間、研究推進校の授業からは、平成14年の4年生「ふれあい いっぱいいち川」、6年生「地球の中のわたし」、平成16年の5年生「だいじょうぶ？ これからの入善米」、3年生「ネギづくりにチャレンジ」、平成18年の5年生「救おう光陽！ エコプロジェクト」など⁹⁾、地域の社会事象や自然事象を生かした、子供の学びを大切にしたい実践が提示されたことを見逃すことはできない。

平成19年度には、学習内容の充実や多様な学びを重視して研究主題の見直しがなされ、「自ら課題を見つけ、主体的に追究し、仲間とかかわりながら、自分の生き方を考えていこうとする子供の育成を目指して」と設定された。研究主題は、「仲間とかかわり」を付けくわえたのである。時を同じようにして、20年版学習指導要領は、協同的な学習活動の重視を打ち出した。富山県内の総合的な学習の方向と一致するものであり、研究の成果が着実に上がってきていると考えら

れる。研究推進校として、県東部立山町立立山小・釜ヶ淵小学校、県西部は小矢部市立大谷小学校が指定され、新しい時代を見据えた研究へと受け継がれた。

教師の教育力を高めた生活科・総合的学習

富山県小学校教育研究会は、1958年（昭和33）から論文や実践記録を募集し、教師の研修意欲と実践力の向上を図っている。その中で、生活科や総合的な学習はどのような役割を果たしているか、応募の状況を以下に示してみたい。富山県小学校教育研究会へ応募された論文や実践記録は、慣例的に各市町村で上位の成績を示した作品である。したがって、各市町村の応募数を合わせると応募総数は、県内総数で例年百点に上るはずである。

例年最優秀賞が“小教研賞”（1～2点）次いで、研究奨励賞（2～4点）、以下研究努力賞、佳作と審査され表彰される。

年度	応募総数	生活科	総合学習	備 考
平成4	27			生活科本格スタート
5	18	3		小教研賞1点
6	17	2		研究奨励賞1点
7	22	1		
8	16	0	1	小教研賞1点
9	9	1		応募総数は研究努力賞以上
10	12		1	〃
11	10		1	〃 小教研賞1点
12	16	2	4	小教研賞1点、研究奨励賞1点
13	10	2		研究奨励賞1点
14	19	2	6	総合的な学習本格スタート 小教研賞、研究奨励賞2点
15	19	1	4	研究奨励賞1点
16	9		5	小教研賞1点
17	21	1	7	小教研賞1点、研究奨励賞2点
18	10		4	研究奨励賞2点
19	13		2	
20	15	2	3	研究奨励賞1点

（富山県小学校教育研究会会報 水上作成）

応募領域は、国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図工、体育、家庭の教科及び道徳、総合的な学習、特別支援、保健、生徒指導、学級経営、通級指導、学校行事、日本語指導、英語活動、幼・保・小連携教育、特別活動、地域連携、国際理解、生活単元学習など多岐にわたっている。

この様な多領域の中で、生活科、総合的な学習の応募数は極めて多い。しかも、17年間で最優秀賞の“小教研賞”は、7点を数えている。それは、県内の教師たちが生活科・総合的な学習を受け入れ、懸命に取り組み、優れた授業を多く出しているという証でもある。同時に、教師の総合的な力量を高める契機となり、富山県内小学校の授業や学級経営、生徒指導などの改善に大きな影響を与えていることが推測される。生活科や総合的な学習は、研修への格好の材料を提供し、子供とともに教師も鍛えているのである。

生活科・総合的な学習研究の広がり

(1) 日本生活科・総合的な学習学会富山支部の立ち上げ

平成13年2月13日(水)、大島町立大島小学校において文部省初等中等教育局教科調査官嶋野道弘を迎えて、生活科・総合的な学習の授業研究会が開催され、その席で日本生活科・総合的な学習学会富山県支部(以下、富山県生活・総合学会)が組織された。

富山県小学校教育研究会は、小学校教員による生活科と総合的な学習の2部会で構成されており、生活科は低学年担当教師、総合的な学習は中・高学年担当教師がそれぞれの部会に参加する研究組織であるが、富山生活・総合学会は、生活科と総合的な学習を一体としてとらえ、生活科・総合的な学習に関心の深い小・中・高・大学に勤務する教員を会員とした。幼稚園と小学校教師が共通の認識に立って生活科を考え、小学校と中学校の教師が同じテーブルについて総合的な学習を考え、実践者と研究者がともに学び合う環境が整ったのである。また、富山県生活・総合学会は、富山県小学校研究会がブロック研修を主とするのに対して、全県を一つのエリアとして研修を重ねてきた。新設されて日が浅い生活科及び総合的な学習であるが、子供を主体にした学びの構築は、「生きる力」の源泉であり、このことを重視する教師の熱意が富山県生活・総合学会の立ち上げの中心となっている。

富山県は、以前から一人一人を大切に教育を推進してきた。したがって、富山県生活・総合学会の立ち上げは、従来の富山県教育をより強力に進める役割を果たすことにもなったのである。結成以来10年目を迎えようとしているが、会員数も250名以上を数え、全国学会などにおける学会員の研究成果の発表、問題提起などを続けている。

(2) 第15回全国大会「とやま・射水大会」の開催

平成18年6月24日(土)～25日(日)にかけて、日本生活科・総合的な学習教育学会第15回全国大会「とやま・射水大会」¹⁰⁾が開催された。富山県支部結成以来5年目で全国大会を開催することには、様々な課題があったのであるが、平成15年の山口大会後に準備にとりかかり、16年の高知大会、17年の広島大会を経て受け入れることになったのである。

全国から1000名以上の参加を予想したため、会場校は一校で賄うことができないので、富山大学人間発達科学部附属幼・小・中学校、射水市立小杉小・中学校、射水市立大島小学校に分散しての開催となった。「とやま・射水大会」は、総合的な学習に対する批判が強い中で開かれたために、大会スローガンを薬都富山にちなんで「問い直そう!生活・総合の存在意義—楽しい学校の『特効薬』、確かな学力の『漢方薬』—」とした。

公開した授業数は幼稚園、小学校、特別支援、中学校を合わせて43。全国に募集をかけた課題発表は、恒常的な課題、今日的な課題など29本、自由発表は84本を数えた。近年にない応募数であった。そのため、全国に依頼した助言者・コメンテーターなどは、実践家、研究者を合わせて100名近くに上った。また、参加者は、44都府県から当初予想を大幅に上回る、1460名を数えた。全国的な総合的な学習への危機感の表れと見ることもでき、生活科・総合的な学習の意義を唱える全国の実践家、研究者が結集した大会となった。

富山県生活・総合学会では、研究成果を発表する好機ととらえ、会員には積極的な応募を呼びかけた。

主として管理職会員は、課題発表の中で以下の提案を行った。

- 「他教科・領域と関連付けた生活・総合の授業づくり」
- 「生活・総合の学びが開く21世紀の新しい学力」
- 「その道の達人たちとの協働による生活・総合の教材づくりと研修・学校体制づくり」
- 「幼・保・小の連携と生活・総合のカリキュラムづくり」
- 「特別支援教育の理念を生かした生活・総合のあり方」
- 「図書館の利用によるリテラシー向上と生活・総合」
- 「いのちの教育と生活・総合」

更に、若手・中堅の会員は、自由発表の中で以下の提案を行った。

- 「心豊かなかわりの中で生き方をはぐくむ子供」
- 「幼児期における自然を生かした造形的な遊びについての事例的考察」
- 「確かな育ちをはぐくむ学級全体での話し合い」
- 「総合的な学習における教師の役割」
- 「初めて学ぶ総合をどう子供に魅せるか」
- 「意義ある中間発表とは」
- 「子供の追究を深める総合的な学習の時間」
- 「年間指導計画に見る総合新設への対応と考察」
- 「理科と総合的な学習の有機的な関連」
- 「市からの委託事業の教材化と市当局との連携を生かした単元構想」
- 「総合の学びを支えるネットワークシステム」
- 「保護者の協力・参加・参画が実現する総合的な学習の時間」
- 「地域の自然や人にかかわりながら学びを深める総合的な学習の時間」
- 「体験から学ぶ総合的な学習とは」
- 「地域力を生かした総合的な学習の時間」
- 「総合における外部講師の二つの役割」
- 「総合的な学習におけるいわゆるゲストティチャーの役割と課題」

提案は、全て実践の中から取り出された内容であり、生活科や総合的な学習がかかえる様々な課題に視野を広げている。発表者も管理職から一般教諭まで、同じ目線で生活科・総合的な学習の意義を理解し、実践に結び付けようとしている。特に、富山県では、管理職が一般教諭に実践的な内容を提案することは、ほとんど見られない。富山生活・総合学会は、今までの県内にお

る研修の常識を破り、それぞれの立場から様々な課題をとらえ、解決を図ろうとする集団である。結果として、富山県内における生活科・総合的な学習の定着に大きな影響を与えている。

富山県における生活科・総合的な学習の課題と展望

富山県小学校教育研究会生活科部会は、今後の課題及び展望として、「体験活動を基盤とした指導計画の作成や単元構想」を上げている。これは、20年間の生活科における不易の課題である。また、総合的な学習の時間においても当てはまることである。理想の指導計画は有るのか無いのか、永遠に問い続けなければならないと考える。それは、子供たちの実態や生活環境など、マニュアルでは解決できない要素を多くもっているからである。生活科や総合的な学習は、前年で成果を上げた授業を同じように展開しても、子供たちの探究心を高めていくことにはならないのである。また、20年を経て、最近では教師の手立て論が話題になってきている。子供たちに質の高い「気付き」を得させるための方策は、一人一人の教師によって違うことを意識しておかなければならない。ここにもマニュアルは存在しないと考える。最近の授業を見ると、教室の中で話し合う場面が多く見られ、生活科も総合的な学習も既存の教科に近くなりつつある。体験や活動を重視する授業は「活動あって学びなし」などと揶揄されることから、逃げているように思えてならない。教師の教材研究、授業環境の整備など、子供の立場に配慮した取り組みは、退化の方向にあるのではないかと危惧する。生活科や総合的な学習は、教師の体かけた教材開発が強く望まれる。このことは、学習の評価の在り方からも問題となる。生活科や総合的な学習では、結果よりも活動や体験そのもの、すなわち結果に至る過程を重視したい。学習過程における児童の関心・意欲・態度、思考や表現、気付き等を評価し、目標の達成に向けた指導と評価の一体化が行われることが求めたい。そして、評価の観点や評価規準の確認、多様な評価、学習状況の過程の評価など総合的に行う必要がある。いずれにしても、教師の評価が信頼性の高いものでなければならない。

おわりに

平成21年4月に移行期に入った新しい学習指導要領は、総合的な学習の時間を現行指導要領の3時間から1時間の削減をおこなった。マスコミは、盛んに総合的な学習の後退の報道をするが、むしろ充実の方向にあることを認識する必要がある。それは、学習指導要領の総則から、教科・道徳と並ぶ章として独立させたこと。また、平成20年8月に「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」が出されたことなどからも明らかである。今まで以上に「生きる力」「確かな学力」などの基盤として取り組まなければならないのである。特に、今回の改訂では、探究的な学習活動、協同的な学習活動が重視されている。例示された内容にも、地域の文化や伝統などが加えられている。より広い視野に立った授業展開が期待される。

富山県は、豊かな自然、誠実で粘り強い県民性が誇りである。県土の全てが生活科や総合的な学習のフィールドと言っても過言ではない。今後も、富山県小学校教育研究会生活科部会、総合的な学習の時間部会を中心に富山生活・総合学会と連携をしながら研究を深めていくことが重要

と考える。

参考文献

- 1) 「一人一人の追究の道筋を自覚する授業の展開」富山大学教育学部附属小学校(1988)
- 2) 「自己実現の喜びをもたせる学習の指導過程をどのようにしくむか」, 砺波市立出町小学校
学校課題解明の記録 21集～23集, (1988-1991)
- 3) 「平成2年度 生活科部会研究計画作成試案」富山県小学校教育研究会, (1990)
- 4) 「小教研50年史 明日を拓く」富山県小学校教育研究会編, (1999)
- 5) 「小学校生活指導資料 新しい学力観に立つ生活科授業の工夫」文部省, (1995)
- 6) 「小学校学習指導要領解説 生活編」文部省, (1999)
- 7) 「未来への扉を開けよう」富山大学教育学部附属小学校, (1999) p146
- 8) 「小教研60年史 共に歩む」, 富山県小学校教育研究会編, (2009) p84
- 9) 「小教研60年史 共に歩む」, 富山県小学校教育研究会編, (2009) p86
- 10) 「第15回全国大会とやま・射水大会 要項・提案授業指導案集」, 日本生活科・総合的学
習教育学会編 (2006)

